

書名：**共に創る対話力**著者：**多田孝志**

出版社：教育出版

出版年月：2009年11月

総ページ数：251ページ

ISBN：9784316802787



推薦者

前田洋一

鳴門教育大学大学院教授

教職実践力高度化コース

本書は、小学校、中学校、高校、海外の日本人学校・高校などの教育現場の最前線で勤務経験のある著者が教育界の閉鎖感を打破し、希望ある伸びやかさをもたらせたいという熱い思いから書かれた好著である。本書の特徴は、著者が全国各地を巡り、教育現場で対話を指導する授業実践を取り上げていることである。それが、教育という未来を造るといふ地道だが創造的な教育実践を進めている人々への応援・励ましとなっている。

第1章 「対話とは何か」では、対話に関わる子どもたちの現状を俯瞰する中で、子どもたちが公共の場で発言できない現状を、子どもに関わる要因として心理的な脅威と対話技能のなさへの不安、これまでの学校教育が行ってきた比較効率重視と正解主義の弊害だとしている。このような中、著者は自立と共生を基調とした共創的対話を提唱している。共創的対話とは、参加者が協力して、利害対立の現状や相互理解の難しさを認識しつつ、叡智を出し合い、新たな価値や解決策を生み出す対話である。

第2章 「対話力を高めるポイント」では、「対話の醍醐味を感得させる」で示された「混沌の活用」と「沈黙の活用」である。このことは教師にとって「待つこと」の重要性を示している。やはり、対話の醍醐味を感得させるのは教師の支援が重要であり、よいコメントができるかどうかにかかっている。それには子どもの発言を聴き「広げ」「勇気づけ」「位置づける」ことができるよう自己研鑽していくしかない。

第3章 「グローバルスタンダードな対話としての『共創型対話』の提言」では、注目すべきは、「合意形成を唯一の目的としない対話」の有効性についての示唆である。著者は、こうした対話の継続により、異なった立場、宗教、価値観をもつ人々の間にもネットワークが形成され、相互信頼の社会関係の拡大・情勢が期待できるとしている。また、このような対話の中から、提言を実現していけば、異なる意見、多様化された現実を受け入れ、他者との協働、共生の思想を共有していく機会ともなるとしている。

第4章 「子どもたちが夢中になり、語り合う対話型授業を創る」では、「学ぶ」とは、自己の世界に根つきつつ、他の異なった世界と「出会い」を通じて、自他の「世界」を豊かにし、さらに新たな知的世界を共につくる喜びを共有することにもっとも効果的な授業を「対話型授業」とし、さまざまな形態の対話型授業の実践例を示している。

第5章 「対話指導名人への道」では、学校全体を対話的な環境にした先導者たちの実践が生々しく描かれている。彼らの勤務する学校がどれだけ活力に満ちているのか想像に難くない。

第6章 「国際現場最前線での対話体験記」では、様々な理由で海外に長期にわたって滞在し、現地の人々と交流してきた体験記が掲載されている。これが、著者のグローバル時代の対話指導の系統化、構造化に資している。

